へ 13
2735
1

へ13
2735
1-4
門へ13
號2735
冊1

周滑平先生著　門人五覽通曇無鏡

才子必讀

妙々奇談

經讀閣藏板

352

序

劉貢父滑稽善謔。酷甚子又而晚得恶疾。至暴亮結社切劾。

昌平坂學問所
浅草文庫
帝國圖書館藏

弼猜嘴閑。而擧社
麓移。黄魯直加豔語。
訪問盛傳。而秀公以
爲。曲受泥稱、業報。
然則妄言綺語。愉快
一時。而人非鬼責。固
莫逃冥明之罰矣。此
編之作者。誠解世理

否子。

太平萬年。冬至之日。

水鏡山人撰

妙〻奇談序

詩を作るよりも田を作れと。家業草創の老翁は金言。道風の花の宮も。香が手ひとつ。蛭明けく〻。錢釘を曲く。淺金をとゝ山あるゝ。樸仁人の名をりゝ〻。泰平の世代の商人百姓ハのあ物味噌が上り米帯甘高で當生帳を記し。唐宋の話を二上りゝ訊い。耕ー牧〻。業を捨く。天下國家を治。善段を爲〻むと計ふ。かゝ財を得〻賢〻と。都會ホ

稜々たる廓を開き、詩を商ひ画を賣て今儲あるとせん
と。互に賣名を争ひ札を立て。燼木の火の付唐紙の志
みる如く。農商の門を入て武八家をつのやまち武
八家と区まちの幾多人我周滑子先生是を数き人付
めきて。世を噪しさを画の先生迚の隠微を技し。小冊子
を著わすを諧謔なりとせん。その論者多し。漢人
其微を知べし武士先生何人ぞ答曰。人倫
三教の本旨を知り。身を保ち家をとのへ。富トの小技
狂哥誹諧。二一天作。二進ニ一十。春ハ耕。秋ハ収。その外
何みるも仕事。知ぶる事なり。實ニ経宗持の者
人と云べし。序とす。

寛平萬年正月元旦

受業　富士紀杉撰

妙く奇談巻上 附評

目録

第一回　良雄説寶齋
第二回　釋尊詰志佛
第三回　米芾詈山交
第四回　栗三壓五三

妙く奇談上

周滑平先生著

五覽通墨無鏡　編集

第一回

良雄説寶齋

寶齋老人或日昃ノ起宿辭既ニ確て。仰酒獨酌を催
えんとせーず。扨かゝ。表の方より青信る者ありて。何方よりと
尋ねバ。芝辺のものや。皆らく閑を清ひ。涼し夜を

て。糸上はいと。若しかくばい及通ると静かにぎとせて着て。
老人その寛怠何人あるむと見をうんをバ。二巴の紋付
ある。麻上下を着し。威ありて猛かくぶ。心よりやしみ。神
又出合出家一侍方とも覚ぶ。姓名を問くバ。拙者
義八侍なるさ。此心。元弘年中お果る負石良雄と
云。此度半夏山心配。禅。岳寺石碑の文を。山法ヶ夜
事有て。然る糸上いと。かなと老人問。其体拭忠誠ハ
天地を貫き。日月と共に輝く事。朝夕感ぎるこ絶り

有。聊不文を以石に鏤る。後を伝人と存をしる。不肖
が微意なり。謙退して挨拶しるべ良雄曰彼奉こ
おる所ゝ云の常の事ふとらくな。公家を平了
向ひ上下武を怠る心より。目を刑て陥ーさ事。思
へり。我ハ豈後世の名誉貪ん。とせるあらむ。止
べゝゝざる所るの誠よ。かくの如きものや。拾ひたる財
の住持廣太の丹情。遺首を泉乗寺に引こ。
葬ひ。四十余人一同に霊魂陥る所を得たり。

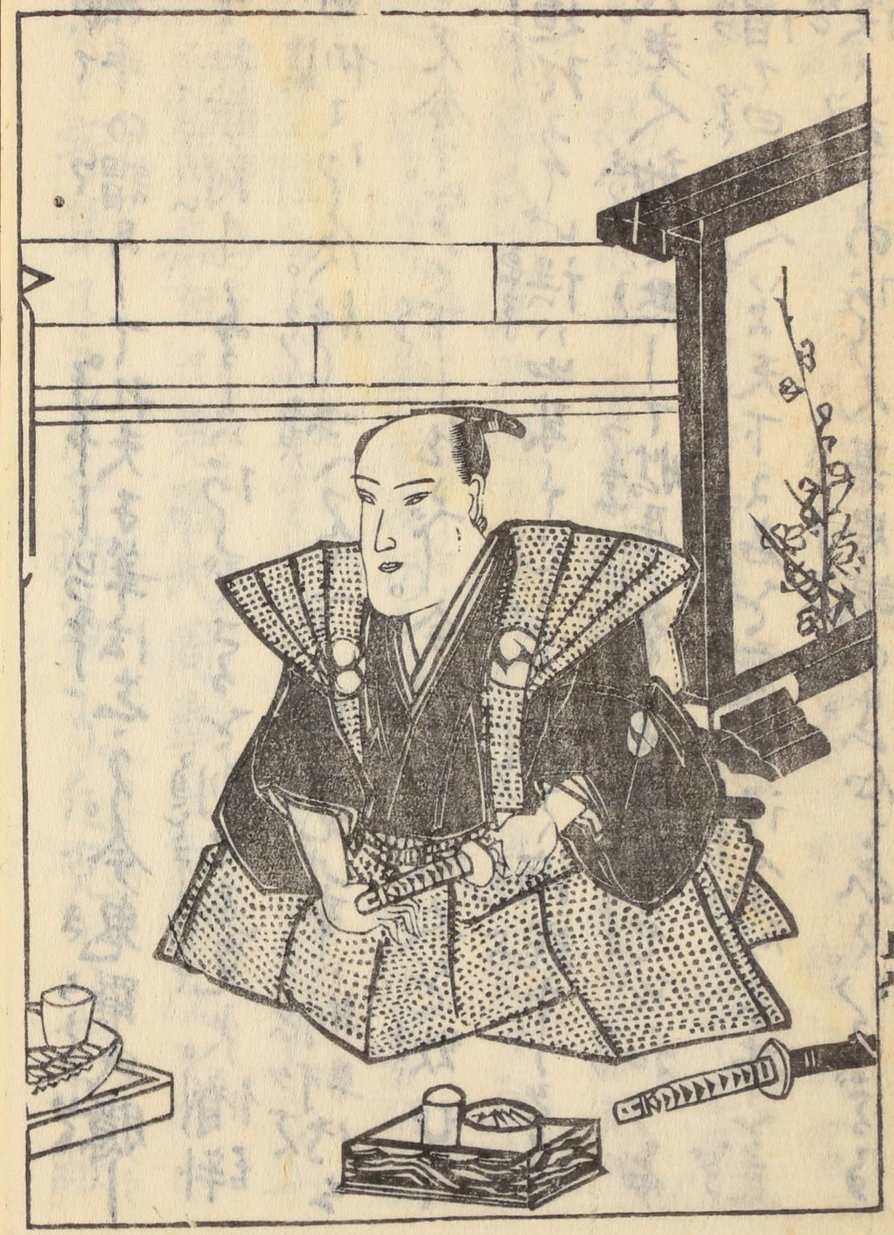
生々の本懐孔しての悦び事う是さ人。さるを
あ〻ひもよ〻ぶ。繰芝居ゑ取組三都そそそそや。
在て近も是をそ。三才の児も。能く我ホ忠誠を
知て〻〻。且又年忌く〻〻。年弧の者多きバ。堂上
何の恣もなさよ。貴殿此度の此世話ハ。俗ゑ〻徐
計の此事ゑ〻又〻多徳行の君ゑ。赤衣冠の
貴人ゑ。ゑ〻バ。さも我〻と思へど。壮年の志強う。
大学志敬を著述の所。ど〻ゑ聖人の道ゑ志ある

拙ゑ思ひ。近年狂風を専ふ〻。一世を瞞〻
人の許言ゑ来て。我伝放坊の行ひ酒を〻〻食ゑ
換へ。殆儒士の風儀ゑ〻〻ど。乱離如此ゑ無稽疎
漏の事間てあ〻て。人を欺き侮る者。猶ゑ又同じ
〻〻を。老人たちゑ〻。年様の論ゑ〻所。尤
道理ゑ〻と〻へ〻。不稽の事あ〻て難ぎ〻〻を
近頃過言ゑ〻む。〻の朱事ゑ不稽ゑ。良雄曰彼是
と論ぶれバ時ゑ移ゑ。是者ゑ〻る一條を一盛一衰

の碑文、刺之不克の四字。不稽なる刺と擊との字義いかゝおとるべき。鬼羅氏之恨あるによつて主君その怒を忍ぶべきを一擊の間に遲せんとゝむひゝて。鬼羅氏元来武辺不案内のくあるべ一支もなく。近足之家ゝ。勇自反のこゝ君なるべ。傍近之士のゝく刺刀程なるべ。出来ざるべ。あるべきを。あるべく。一刀て疵付て。鬼羅氏周章大方なる所。その内某ゝ寄集てこゝ君を抱奪る。允克とゝ。匹敵

相手の謂て。孔夫子筆法之ゝ。今鬼羅氏臆ゝて敵対ゝ多くハ刺之不克と。俗辞の例ゝ。徒ゝ味へべゝ。畢竟ハ事ハ前車付ゝ之合て字を下ゝ。今例の英雄人を欺ゝ道理ゝ誤ハ出来ゝ。世を打ゝ演説ゝ。老ゝ智ゝ黙ゝて性居多ゝ。良雄顔色ゝ和ゝ謂て曰老ゝいよ天下之名を震ハ達人ゝ加ゝ事を直談ゝ。ことのゝ人某忠誠の生心ゝ。

李太白集
陸放翁全集



を得ず。此上心を付く。名所の碑。又八一通りの碑
とて。自得の書法をのべ暮ひ。必忠臣孝子林の
事蹟を挙く。山嶺有り。世神灵の助ける所也
山中に西賛公舜水と命じ。楠氏の墓を立
し。廷尉の忠魂感ずる所也。百世の下。名のくちり
を欲ずる心より。起る也。某等八院々墓
のうて。姓名を記し。其上人口々膾炙して。大祈
とせ。こゝ事ちがひ。老人の文ありて。達人の欲

見る。老人の文有とて。後ろ彩ゆ又某お伐感じ見る
数まるゆ八四十七人の墓を并べて建る。先師住
所の廣恭の情ゆ。官より咎めゆ八佛法の
餘徳なり。今又碑を立て号伐表し。世々敬ばん
八。官の見るもめでや。面掛の商内て。十分酒と
呑めなるべし。世醉ぐさ。先ず中山道より江戸右く
書画會を催し。寫三ぶ贋画を圍む。錢をもふ
あく酒かみて。砕てくゝ次ぶ能くべし。文趙

が理窟をいふ。ハテ其時ハ醒ての上の作了簡

墨溟化物其名寶　撥開跋扈醉顛翼

斯不養生移呑池　錢金尾羽枯無力

受業　五大莊題

評曰宝齊の碑文。その紀縁を擧バ。從白あるべ。されど君子ハ厚く人を責めずとあるさバ。負石が只一句を作して宝富をさきめたるハ長者の風を見るこそ思ひ。畢竟負石が忠誠ハ。昔し近松が加古川本藏の言こ托して

唐と日。中々たつ〳〵二人よゝへる一語まく有り。寶高を待ぶるあり。

負石を近松が大星と作り校合封の學徒こ見せしバ。やうやう判明する

第二回

釋尊諸志佛

嵯峨釋迦如來。年數こ當り。和所回向院こ開帳ハ。衆人〳〵結縁こ至。わろい夏の事なきバ。老若男女群來り。いろくの扇をかざし。多中ふ東坡風の

長葉の行よ。志佛と云ふを人咎め問ひける後
本尊を問ひ問ふに。志佛とは此の国ぞ。賢劫の四佛を
我れ知る。外に出店を利賣はず。其九百九十六佛
の名を授ける。星宿劫不佛の名も。況んや過去
怪しさとの。世を出ずと。宣べば本尊あるべくと吹
聴。さらく世を去る。京の田舎に住む。流行る
後世を知る。此の存ずるも理やとも志佛とは。北三
表六門を成り主。山仲如ぞ餘瀝をなめ。市川

完齋ある。に取立られ。南村の行の名人。知る池に住
定める。大久保聊右郎を事へよ。釋尊曰我
四十九年の間。華嚴の初會より。双樹涅槃に至る
八百餘種の法。自分佛と云ひ。偏学小智の
知る処あるべ。本尊曰。されば唐の張南湖老杜詩
中の佛と云ふ。完齋が序文を出す。釋尊
曰。是南湖の杜氏を誉る。自分極ぶ
不東也。壽永の藝者の佛を京都の医師ぶ佛

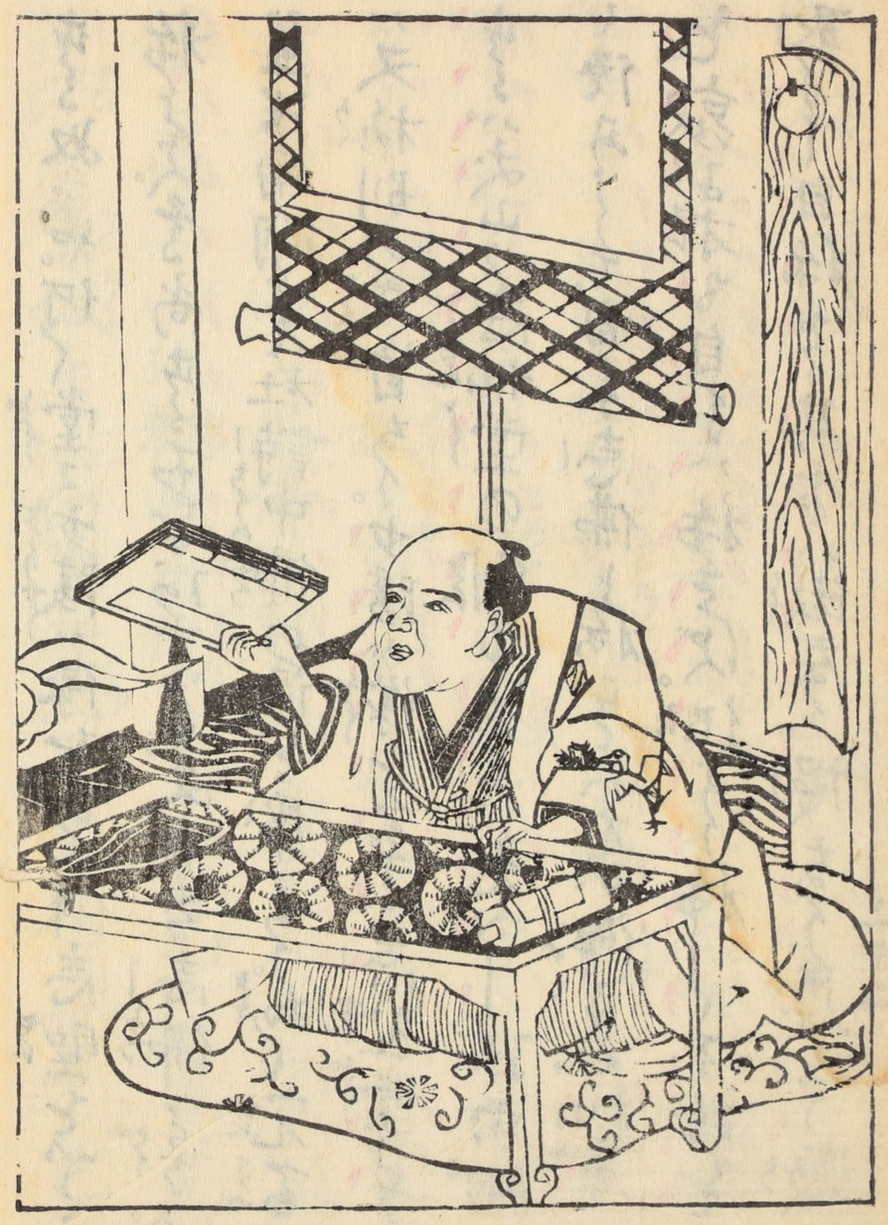
上十

九佛十二佛。尾張の仁左ゞ運羅を渡り五佛と名付
ちよ。全く自身慢の心あり。名聞多きなり。し
や。何ぞ、せよ我近る閑帳絡り隙なるべ。聊か郎を
逢ふ乞ひ聞べ。と作て乞ひ。ぐ行く日限なり。
増成寺宿坊に寓居の時。此時節ぐらなきバずと
所倫約あり。て新八部の出仏も連られ戻。此前々
常燈を捧く。忍び中五ら地に来臨し五ヶ聊か
郎かゝ名幸とよ愛ゐ志戻。唐初とかゝ。放翁

石湖が集を見く。清新の句を鍊り出さんと。業ド
居ゐ所へ紫内も善哉もなく。机の上。影向ま
く。志聖堂志佛とハ汝よる。何の因縁をん。志聖
堂と号く。何の因縁をん。志佛と名付く。詳に述べ
宜へバ。聊か郎の一ヒ驚がを。傍の玄義より。三冬の
冊子を半。其ハ沢山序にありと差出を釋を手て
ゐ乞ひ。何志聖堂詩集。ヲフ北、三ぶ序を読ま。
何ぞや。哀子才に景倣し。志佛と号を。汝ぞ沢

大師答曰。然り。扶桑国に志佛と云
ひしあり。将心餘太はなが和氣みく。自分志仙
を号せり。右隨園を敬奉りて志佛と称せり。
ありてれを隨園も喜ばく。爺を称ふく志佛と
なりて又詩を教えるの義やく例の自傲の心ひ
門人の梅沖が志佛の名を作り。時く名を賣く。声
價を増し口地糊するの使ふ。自分称を袁
子才を景仰まるに何事称。此三も世称る。故事を

まる故ぶや。何く堂又少陵が像をあん志聖をいて
称ふ。号尚まるを、つとつまる。又自分志佛と号す。
盆陪南湖ぶ老杜詩中佛の語を取るまる。和く完富
ハ又格別の文旨ちり。少陵が像を彫く。志聖堂と号
まるハ丈山々志仙堂の例もいきハ元べ。陪南湖
ぶ語みて。自分志佛と称ふ。尤ハ僻る。拙南
七京子才も自分ハ称まる。他より称ふ後を
取りて自称ふ其方ハ傲ちく。慢ちく。愚ちく。癡



ゆゑ試に志佛志聖堂と称して人よ汝らの
我が構はずとも知るべし。例に一言云て曰さん諦聽
杜甫を詩聖詩仙と称せし。皆人の知る所。樂天が
小鬼鐘を詩魔と稱し。鍾嶸が陶彭沢を詩宗
又李洞が賈島を詩祖と目し。呂居仁山谷
を称して江西詩祖と称せし。ゆゑ人ありて
告天鈍翁李洞呂居仁ら語に依て自ら詩豪
詩宗詩祖と称ぶ。いつの人か。將心鋒太史

社島鹿者が自ら詩仙と称して。時の言名ある隨園
を。己と一ツ穴の狐をねば。世の人が承知せまじとの
簡みなり。袁子才を詩佛と崇めたる和。袁子才も
然さすと思ひ。傲慢の心起りしは。根が聖學に疎く
空詩浮文に窮をもつて。賣名射利の匹夫なれば。
花の華やかなれを景仰して。簡もなく。志佛と
名乗る。其方も序文をもつて證左あり。北三や完高
といつの孫宝八学でなるさ。卑劣心が見えて。面白く侍さ

と。眉をひそめて宜く宜く。聊か面目
紅涙張り。ゆるひく難く同。釋尊の佛は廣く慈悲
三界の衆生救はんとて。羅候羅のあくとゝ
聖の志。佛と名付くるなり。たゞ世の害のみ
なるとなり。世尊は流を汲て元の家も。
人と佛の根源信じ。身く自性自性の魂な
く。世上濟度の利益となく。頑童梵嫂の身を
嬉し。酒肴珍味の腸を爛し。酒肴あさい迄

は味方見者しなく存ずと。其汝が知る処。
国家より八宗十宗立置て。廣く慈悲の御政。
万国を二のなめく。凡慮の知る処。
力なく平反をなく。毒蛇風の墨行を書て。世の
をそれさき。俗手して右平を貪り。
右平の國恩をも忘ぶる心。ひく罪問の人なる
るなり。汝ぞ世の害となる。況八下局て。細の況を
すべし。サテ佛と名付る汝。いま未功徳方使の系

いろ〳〵廣大教えは事あり。如何なる後が覺の義
なるや。夢かを問答し給。志佛茫然として詞
なし。

讃道我學放翁去　心操放埒終百癖
作詩好知鬼神吐　於世教無些子益

評曰。志佛が詩を作て陸放翁を慕ひ。されと放翁を宋の忠臣胸次脱洒の人なれば。今の世又しかるべきあらんも。かるべきなり。志佛も

生酒好て。大佛餅金龍山拔て平く不利なり。
なり。釈迦如来をもモチて。さめたる事なるべ。
志佛がもちあり。ひくもも理なり。

第三回

米芾詈山灰

阿山灰百第子又書論を口授して後。机によりて
眠る夢又。米元章と名乗て。得を通じ。空空漠
て曰。只下近来書名せる噪しく。止事を得ぬて。

黒白断其外古人の條論を拾ひ集め梓行し、不聲
價をうんと行はるる。尤も世俗の市井庸常の射を得て、人〻崇敬され、治療の術を
はじめ。學問の叙説を乞ひ。上不一。世上の人〻
蠱惑し。治療上手の名と貪らんとまるめ
今是下我を敬まる。他に異なりとも。是
下の為に不ハ予が喜ぶ處にして。我世に在り
時時顛の名あり。元来拾法を

得。その奥を悟り。運用神化自得あるよりして。世
心よりして世を軽んじ。俗を抜し。縱逸自適
楽しむ。是下にして。市中に居て。俗を的とし。利
を射る心。何ぞ我境界を知らんや。世事をとらん
や。是をして。その倫を乱る処。時俗の耳目を新
まるのみにして。墨池の理よりもいれず。殊更
胸に升降有。人の質性浪にして。試に我論を
事。水字八法。点来古体より。丸。甘の金伐場

若かく〳〵よりて又書を考へて法を得へしるべし。執筆運用ハ手より。変化奇絶ハ神なれ我がつまる。人の性質に限りなる所あり。欧褚虞薛王氏父子を法に取て正〳〵学ばん。自ら一家をなすべし。王氏に似ず。結構成佛作祖の器なり。品題賞鑒〻〻なりてハ。相及ざるる遠し。これ所謂時の升降にのぞばん況後世の人まるて。蘭亭黄庭の神妙変化豈窺易からんや。東坡章子厚

技巧ハ者ハ此老の心を師として法みを反自放にして。一家をなすむ〻ものの湯なり。是下山谷が語なり。

て。事技単鈎なり〻〻。さて又一偏の論あり

て公論みなるべし。かく〻単鈎なるも。吾子行〻云

しかなり。第三指夾襯せざれば。一畫に力なし。世

俗不ものある鈎筆曲言のめくみ〻て。ものあた

へず。事技豈かくのかあるべしや。是下試に筋を

取く。飯を喫して不よ。三指夾襯せざるして。口

中ゝ食を送らんや。よく送り得ることも。傍観よりらず。自分を不自由なり。又草書を以て楷よ用る。
筆法彩色のごとく。殺伐寄特なりこれへ。
を学の拙を嫌の云ふ所の所。悉く世を忘れし。
概やんとなるあらべし。云況を以て通ず
免ることを。示の字の篇。行草を書の代ず。楷
象み用ひず。且又点下仏物の人よ。馬扁
佳旁二三相並ぶ時ハ。皆運筆を異あるる。点を

書才妙用変化よるハ。墨本法帖をなく人
ゝ。古人の用筆をなく。味ぶべ知
を紙に点下たるもの。相比新ゝ。筆を
体得ゝ。何とやら董堂が甘昌風に害ハ
撥きゝ。又点下の偏ぶる石ハ暫く置く。夫古今
書才にのゝ。書学ある者ハ。大方疎漏ゝ。
古学あゝ。書才ある者ハ。法帖傳ゝ。
ゝ。偏ぶ。墓み偏ぶ。活動ゝ。或

ハ古人の奴僕なり。或ハ飾人形なり。専なる糸ハ
古法をへく。自己の精神を。運用するあるもの。
心ヲ下ニ告べき事なり。書名も必人ハ名を
貴し。人不阮ニ高々ならず。書ニ限ル。小技なり。
なるべく不朽ニ品くるなり。古今ニ渉て墨あり。
農諸顔柳の忠義節烈を。亦後朱子
のごハ。格物のごとくなるも。学者人ハ依て名
朽ず。今ヲ下逼ル。礫ル人ハ幸ニ

世ニ出ずして。高貴の人を門人ニ持。書画會
ニ頭を多し。顔楷ニ倣ふ。不墨本も坂三津
ぶ由良之助。顔氏在世の時ハ。癡肥也と称し
人と為ル。今ヲ下の書ハ。識者何ぞ
称ん。何を以ル。足下人才研ル。後代
不朽ハ費東ル。今ヲ別ニ工夫し。我顔の境
界をなし。市中の乞ル。賣名射利の念を止
め。法ヲ。精神を運用する。悟ハ

我と又喜ぶべし。この俳諧ゆゑ交る人多あさく
後會を期すと。云ふと覚へハ爰醒ぬ。米蓋少
しく省あるらくとも。狂俗心ゑ衣のめく爰を
〻徳哀て。爰ニ来芾を送ル。

學詩書畫同興連　街役賣名各發鄽
聲價沸騰萬犬噓　後来不當半文錢

友人　未足齋題

評曰。米芾晉唐法書ニ爛醉して。その狂状
なる妙を極し。自らその室を号して。寶晉
齋と。後人ハ法を古人に学ぶと。代知ら俗安
ニその洒落は迹を擬せんとせバ。犬ニ米顛乃
軌をニ非ず。この一話をしるしを。俗眼を一先ず
うるハ。田夫ニ渉て云。役者の親ゑハ。市川三升。
ちなみ釈ゑハ。市川三猿。田夫笑ふ。米蕭
々唐土のくらて。板三津の由良ゑ助を知

る。足下何ぞ我を欺くをらんや。

第四回

栗三壓二五三

菊乳佐太夫。何がる工夫して。金儲せんとおもひ。
隨園詩話よりのおもひ付あて。町方に居て已に
後に肩医。田舎主不みく汚語碎金宋汚語
を模擬する。富家のる事は。汚を集して其
人に身上を。百疋弐百疋。或ハ五匹刻料雑

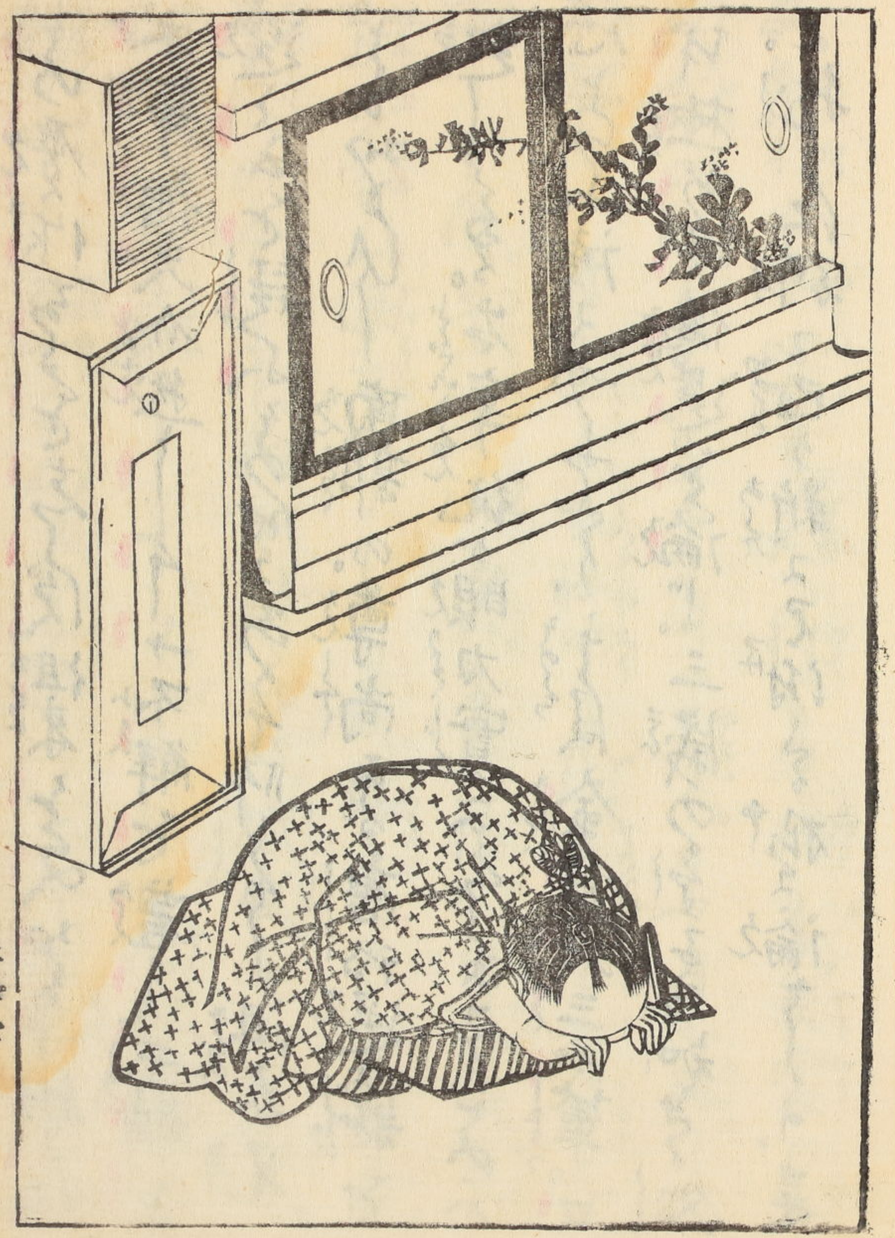
費の資として。若しあんとの了簡なりしが。名も
なきことの話を集るゆゑ。世の賞翫と覚兼な
ければ。おもひ依く没故なし人の汚を。集中入るこ
なりとて。資料の徳ハ多くなれど。義侠心なく
して。ただ。我をくるる。年死去して。芝栗
三先生の神霊。この憤りを或時人をして。
本町植木店よりの免。佐太夫が魂神を招いて。
呼取りあり。佐太夫ハ如何事と無露なる。又

金儲の工夫最中。殆目くるみ。恍惚として立る
時。其人の僕来りて。聖堂より急使用ある。疾速
さるべし〳〵。佐々夫子扨と取敢ず。支度して彼
老と同道して。聖堂に参る。所々門を入る事。
講堂に通るとなれば。芝栗三先生上座にあり。
其外列坐の人も。多くは古人にして。ぶに怪
み躊躇する時。栗三先生曰。足下汚話を著し。
予をも集に入らるべし。由早速揆抜をなすべき。

不甚心延引せり。こゝは雅少なるべし。小判三枚白
木の基に載せ。さし出す。佐々夫忽ち顔色を
和らげ。存ぜざる所の謝礼。恐悦戴佐
々夫曰。足下汚話を著し。或
ハ賞誉し。或ハ評語を加へ。一時に冊をなす趣。
其集に入る商家。又ハ農家の子弟。こゝに依て
自分傲慢心を起し。我が汚を五三く誉たりなど
ものゝ心よろこの家業に怠り。一廉の汚く氣

取るるる。心歎ぶきるや。且我幼年より聖門有用の學体学び。彼ハ我心ともるるあるぞ。彼を足下拝ぶを以て役を任卑陋の廣人と同く評せ〜す。遺根あるき。我家とまるる不。足下の知るるきて〜つ〜ぶ。豪豈足下の浮賞体ぶ人や。足下豈ち〜臧否を与〜んや。全我等を作道具み〜く。名を賣り利を駈んともるや。偽て所謂虎豹の皮をき〜く。大家を威まるの手段ちる。

きさ〜ばとるの徊ヨ加〜う。足下の門ヨ入るるのハ皆碌〜の人ち〜。空詩浮文を〜く學ぶ。聖門の學を以く學とする某。何ぞ足下の謀計を為て。名を賣て求めんや。卑劣ぶ手段浅ま〜。威儀嚴然と〜やさ〜ば。五三低頭〜〜口ぶ同〜るの舞ぶ漸〜く。近頃寛齋ぶ偽唐詩選の論を小冊ヨ綴り。梓行やし〜ハ。ぞ又何事ぶ唐詩選のすハ南郭が千鱗を宗ちるぶ迷ま。



その賢作ありしを文のみ拙く
太宰徳夫介然ーナ不解と著ー手鯖が
選と云を疑ふ。その附ニあて師とやー但来。兄
もかしー南部の。尊尚る唐詩選。旅と
起ーる多。太宰純が眼力實ニくまさるとハ
心とふ通ニゲーり。さて金我北三が筆。口
は極りて偽選と論じ。三歳の童も知る必
こ。我ニ別ニ已ニ新ニ又汚る拙論なり。是

又射利の卑心なり。先ヘ行るの跡なり。衣裳の美
拙。帯の解ル多をつくるハ易く。なるも難し
太宰いまだ射ニ在く。世社中ニ居。偽を知る。これを
難しとす。卒心ニ論ぜず。まの清人の偽作を
見太宰が眼力あるしる。拙なるべきなるに。
学ぶ風の合ざと。利を射るとハ織盛なるを。
已ニ物ニ新ニしるるものの偽心なり。そも
別ー呼ー云ずんとなりひしー。その去ると全

儀辺今ふれ。汝よりやすく置ち。世ともに空行浮
文を梓行し。今儲せんとすれども。畢竟汝
等が著述は世教改道の害ぬる多く。益ある事
少し。その強く著述梓行せんとは我吳林家で
決して方ちさん。そ国家の為ならず商人百姓
の後世子孫。空行浮文にその才を忘きく。其業を
怠るのちふしめん。我仁心なり。今日は先その
中を改めざるは。詐りをぬぐ。三度

上廿七

ものの一事を発きき。佐夫義の賞たるべし。懐
中を捜りて見ば。小判三枚有。何もせよ怪しきの
と絶えんきバコリヤそ蛭小判。

五山強欲治家苛　貪取金銭縄耶麿
生國讃州非相撲　大山大商不道多
嫌市完齊射利魁　江湖社結大廛開
不経紀商見限早　貪取小禄謀後来

晩學夢　野徹芳題

評曰黄石公の丹書に。命の四業。一曰恵又
背き。二曰己を恃み。三曰不肖を押す。四曰賢能
を妬む。總て四の業あり。世俗のく評。欲の
五山あり。一曰行活の梓行。二曰師匠の名を賣
て三曰大家の顔色。四曰詩會。五曰書画會。
總て五の山なり。この四業五山。つゝしみ慎
まざるべからず
妙〻奇侯者上終

皇国文庫藏書